

聖書：Iサムエル8：1～22

説教題：王を求めるイスラエル

日時：2016年1月10日（夕拝）

イスラエルの歴史に、この8章で新しい転機が訪れます。イスラエルはこの章で自分たちのために王を求めます。彼らがそう願った背景の一つにサムエルの老齢の問題がありました。彼はこの後もサムエル記で重要な働きをしますが、現実問題としてこれはイスラエルにとって不安な材料です。これに加えてもう一つ、サムエルの二人の息子たちの墮落という問題もありました。2節に長男ヨエルと次男アビヤは「ベエル・シェバでさばきつかさであった」とありますが、おそらく父サムエルがカバーし切れない遠い辺境の地であって、父の働きを助け、補助する役割を与えられていたのでしょう。ところが父の目の届かないところで、二人の息子たちは賄賂政治を行っていた。前に見た祭司エリの二人の息子たち、ホフニとピネハスも墮落していましたが、何とサムエルの子どもたちもそうだったのです！果たしてエリの場合と同じように父サムエルに非があったのか、それとも子どもたちに問題があったのか、・・・そんな中で長老たちはみな集まり、ラマにいるサムエルのところに来て言いました。5節：「今や、あなたはお年を召され、あなたのご子息たちは、あなたの道を歩みません。どうか今、ほかのすべての国民のように、私たちをさばく王を立ててください。」

この言葉はサムエルの気に入らなかったと6節にあります。それは心情的に理解できます。これまで一生懸命、彼らのために仕えて来たのに、簡単に言えば、「もうあなたは年を取りましたから、そろそろ引退なさってはいかがですか。新しい、もっと力ある人をリーダーに立ててくださいませんか。」という願いに聞こえます。それに加えて自分の子どもたちのことまで非難されます。どこに問題があったかは別にしても、家族のことにまで触れられて、「だからあなたではなく、他の人を」という人々の言葉を聞くのは大変つらいことでしょう。しかしサムエルの素晴らしいところは、「そこで主に祈った」と6節に書かれていることです。怒って彼らに言い返したのではなく、まず主の御心を伺った。ここにサムエルの偉大さを見ることができます。

さて主はサムエルにどうお答えになったのでしょうか。主はサムエルに7節で「この

民があなたに言うとおりに、民の声を聞き入れよ。」と言われます。そしてまず「それはあなたを退けたのではなく、彼らを治めているこのわたしを退けたのであるから。」と言われます。主はここでサムエルを慰めて下さっているかのようです。あなたはこのイスラエルの言葉を面白くなく思うかもしれないが、それは本質的にあなたに向けられたものではなく、このわたしに向けられたものだ、と言われます。そして8節でこう続けます。「わたしが彼らをエジプトの地から連れ上った日から今日に至るまで、彼らのした事と言え、わたしを捨てて、ほかの神々に仕えたことだった。そのように彼らは、あなたにもしているのだ。」ここに王を求めるイスラエルの態度をどう見るべきか、主の判断が示されています。

それは一言で言えば、彼らがこれまでも繰り返し犯して来たように偶像礼拝の罪であるということでした。本来、イスラエルでは神ご自身が王でした。かつて士師の時代に、人々がギデオンのところに来て「あなたも、あなたのご子息も、あなたの孫も、私たちを治めてください。」と願い出たことがありましたが、ギデオンはこの原則に立ってこう答えました。「私はあなたがたを治めません。また、私の息子もあなたがたを治めません。主があなたがたを治められます。」ところがイスラエルはこの時、主を退けて、目に見える人間の王を立て、それにより頼もうとしていたのです。後の12章12節でサムエルは王を求めたイスラエルについてこのように述べています。「あなたがたは、アモン人の王ナハシュがあなたがたに向かって来るのを見たとき、あなたがたの神、主があなたがたの王であるのに、『いや、王が私たちを治めなければならない。』と私に言った。」

彼らをこのような思いに駆り立てた要素として、この章に示されていることは、周りの国々の姿でした。5節でイスラエルの長老たちはサムエルに「どうか今、ほかのすべての国民のように、私たちをさばく王を立ててください。」と言いました。また20節で民は「私たちも、ほかのすべての国民のようになり、云々」と言っています。周りの国々は、王を中心とした強力な軍隊によって国を守って行こうとしています。その姿は力強く見えますし、華やかです。自分たちもあのようになりたい、あのように立派でありたいと彼らは願ったのでしょう。これは世にならうあり方です。本来イスラエルは自分たちのユニークさに生きるべきでした。申命記4章7～8節：「まこと

に、私たちの神、主は、私たちが呼ばわるとき、いつも、近くにおられる。このような神を持つ偉大な国民が、どこにあるだろうか。また、きょう、私があなたがたの前に与えようとしている、このみおしえのすべてのように、正しいおきてと定めとを持っている偉大な国民が、いったい、どこにあるだろう。」 イスラエルはこの独特さを捨て去って、周りの国々と同じように歩もうとしていた。「この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」(ローマ 12 : 2) とは反対方向への歩みです。

このように王を求めるイスラエルの願いは、主の目に正しいものではありませんでした。しかし今日の章の驚きは、このような彼らの願いを主が「聞き入れよ」とサムエルに言われたことです。この結果、イスラエルの統治のあり方は一気に王制へと移っていくこととなります。これはどういうことでしょうか。なぜ主は彼らの正しくない願いを受け入れられたのでしょうか。それはイスラエルに王を与えることは、主が前々から持っておられた計画だったからです。申命記でモーセは将来、約束の地で王を立てる時にはこれこれこのようにしなければならないという規定をすでに語っていました。さらに遡れば創世記 17 章で主ご自身がアブラハムに「あなたから王たちが出て来よう。」と言っておられます。そうするとある人は、ではイスラエルのこの時の求めは何も悪いことではなかったのではないか、それは主の御心と一致する良い願いだったのではないかと言うかもしれません。しかし物事の表面が一致しているからと言ってすべて良し、という考えは聖書にはありません。その分かりやすい例はイエス様の十字架です。イエス様が十字架にかけられることは御心だったのでしょうか。確かにそうでした。神はイエス様の十字架によって私たちが罪から救おうと計画してくださいました。ではその御心の一致する仕方でイエス様を十字架に付けた人たちは良いことをしたのだと言うべきでしょうか。とんでもないことです！彼らは決して神の御心を行なおうとしてそれをしたわけではありません。彼らはただ自分たちの悪しき欲望によってそのことをしただけです。ですから神は、結果がどうであったかという観点からは物事を考えず、その人が何をしようとしたかという心の動機をご覧になり、それによって私たちがさばかれるのです。ただここに示されていることは、神はそのような人間の悪さえも用いてご自身の良い計画を達成することができるという

ことです。この時のイスラエルは神の計画を理解し、敬虔な思いで神が望まれる王制を作ろうとしたわけではありません。ただ偶像礼拝の心で周りの国々のようになりたいと願っただけです。しかし神はそんな彼らをあわれみ、忍耐し、彼らの悪から良い御心を実現する道を選ばれたのです。

ただし私たちはこのことも心に留めなければなりません。それはこのイスラエルの悪は問われないまま、ただ神の祝福だけが彼らに注がれるのではないということです。主はここで彼らが願う通りの道を行かせますが、それによって彼らを苦しみへと導かれます。彼らがこのあと様々な悲惨の中に置かれるのは、初代の王をはじめとしイスラエルの王朝時代の歴史を見る時に明らかです。彼らはそこで刈り取りをしなければならなくなるのです。主はこのように彼らを将来悔い改めるための懲らしめの道へと導かれたのでもあったのです。ですから私たちは自分が願っていた道が開かれたからと言って、それだけで喜ぶことはできません。それは神が是認している証拠ではないかもしれません。それは祝福の道であるよりは、むしろ危険な道であるかもしれません。私たちは自らを吟味しなければならないのです。これは神に従う歩みを通して神から与えられた道なのか、それとも私があまりにも頑なであるため、神がまずはその道を行かせたが、その後の試練を通して悔い改めへと導くために与えた道なのか、と。

主はここではイスラエルに次のことを厳しく警告しておけ！と言われます。そこでサムエルは 11～18 節のことをイスラエルに告げます。そこでは王制を取る結果、どんな問題が生じるかが予め警告されています。すなわちあなたがたの息子たちは戦争のために徴兵されること、あなたがたの娘たちは奴隷のように働かされること、あなたがたの畑や所有物は没収されること、税金を取られること、自由を制限されることなど、・・・民はそれを聞いてどう応答したでしょうか。19 節にありますように、彼らは「いや。どうしても、私たちの上には王がいなくてはなりません。」と応えます。非常に強情な姿です。聞く耳持たずです。敬虔さが微塵も見られません。自分たちで結論を先に決めて是が非でもそれを押し通そうとしています。しかし主はこのような彼らの願いを聞いて行かれるのです。これは何という傲慢な要求か！と突っぱねても良いはずなのに、黙ってこれを聞き、やがてのダビデ王朝を備えて行かれるのです。そしてさらにそのダビデが指し示すまことの王キリストへの道を備えて行ってくだ

さるのです。

以上の I サムエル記 8 章を読んで私たちが思わされることの一つは、私たちも彼らのような傲慢な態度を主の前には取っていないかということではないでしょうか。主の前にこのような凶々しい態度を取っていないだろうか。偶像礼拝の心で、主に要求することだけ要求し、自分のしたいことをすることにだけ一生懸命であることはないだろうか。彼らと同じように強情で、自分が主であるかのような歩みをしていることはないだろうか。そして二つ目に思うことは、私たちの歩みもこの章に記されているような主の忍耐とあわれみに深く負っているということです。私たちの側に誤りがあるからと言って、主がそれをいちいち指摘し、そのたびにご自身の良い計画の実現をストップさせていたら、二進も三進も行かない私たちです。私たちも主の前にあまりにも無礼で、不信仰な姿をさらけ出しているでしょう。しかし主はそのような私たちに忍耐し、その怒りをとどめ、へりくだり、あわれんで導いて下さっているのではないのでしょうか。その主によって今日も支えられ、生かしていただいている私たちなのではないのでしょうか。私たちはその主を見上げて今夕、心から感謝をささげるとともに、また悔い改めたいと思うのです。主に忍耐を強いていながら、益々いい気になるのではなく、むしろ自分のあり方を振り返って大いに自らの傲慢さを恥じたい。そして主に私の言うことを聞かせるのではなく、私が主と主の御言葉に聞き従う者であるように。主から心が離れ、世に同調し、靈的姦淫を犯す者ではなく、主に私の第一の愛と忠誠をささげる者であるように。そして主が備えてくださる最善の道へ、主が喜んで導いてくださるところの主の民の歩みへ導かれて行きたいと思います。